



本号の特集である管内からの調査・探査・診断技術について、様々な技術が紹介されておりとても参考になります。特にノズル付きカメラには清掃と調査を同時に行うことも可能な技術として期待したいところです。下水道事業も人口減少により人手不足が深刻であると考えています。作業効率がよく、人手でもかからない技術はこれからマッチしていくと思います。従来の劣化判定 (a, b, c) のうちa判定だけのものであっても、膨大な管路施設を優先度に合わせて点検・

調査する箇所を選定することで、有効な調査方法になり得ると感じました。

海外イベント報告はアメリカやドイツなどのイベント報告がなされていました。管更生工法も海外が発祥であると聞いています。取り入れるべき技術は取り入れ、逆に日本発の技術がこのようなイベントで紹介されることを望みます。



今回特集されていた「管内からの調査・探査・診断技術」では、音波や衝撃弾性波、映像等による、多様な調査・探査・診断技術をご紹介いただきました。データの精度や対応可能な環境、調査スピード等、調査技術の進歩は目覚しく、これらの技術を組み合わせると、小口径管から大口径管、管路内の水位条件等、様々な条件に対応でき、管路の維持管理に大いに役立つものと感じました。

これらの調査の目的は、膨大なインフラ施設の

持続的な運用であると思います。今回の特集の中には、持続的かつ最適な事業運営へ向けて、スクリーニング調査の実施や予防保全管理へ向けた取り組みについても紹介されておりました。今後は調査技術のさらなる進歩と共に、調査データの評価手法や管理手法等、ソフト面の整備や管理体系の確立が必要不可欠な課題であると感じました。



下水道管路更生の設計に関わる私にとって、No-Dig Today 104号の特集であった「管内からの調査・探査・診断技術」は実務に直結する内容でありました。設計のためには、下水道管内の状況を知るための事前調査、診断が必要であり、それらの新たな技術を学ぶことができました。特に、厳しい環境下にある下水道管内調査方法の、非破壊検査から非接触検査への移り変わりは、現場での事故発生を大幅に低減するだけでなく、調査の必要がありながら調査が困難で見送られていた箇所に対しての、調査、診断を可能としていくことを感じました。さらに、老朽化が進む下水道

管路には、効率的な調査、診断方法が必要であり、今回紹介された技術には、調査者の熟練度に左右され不仅需要だけでなく、人以上の調査、診断及び適切な評価を誰でも得られるものもありました。近い将来、実際の調査現場での活用が広がることを実感しました。

経験が浅く、まだ十分な知識がない私にとってNo-Dig Todayは、新しい知識を得るだけでなく、現状抱えられている問題が何かを再認識する貴重な機会でもあります。これからも毎号拝読し、色々勉強させていただきます。